陸軍愛国号献納機調査報告

その4【標記、消息、まとめ】

横川裕一

愛国52「新潟県」号。

愛国号の標記

愛国号の標記と継承に関する陸軍書類には、次が分かっている。

●「国防のため献納する兵器、被服、衛生材料標記等に関する陸軍一般への通牒」(昭和7年3月11日付、陸普第一四二五号)

国防のため献納する兵器、被服、衛生材料標記等に関しては自今左記のとおり定められたるに付き依命通牒す。

1．献納による兵器、被服、衛生材料等には「愛国」と標記す

但し航空機、戦車、装甲自動車、火砲等形状大なるものは「愛国」の標記と番号とを記入し、その次に括弧を附し献納者の姓または地方名、団体名等を記入す

2．前項による献納者の姓または地方名、団体名等の標記に関しては別に定む

3．使用の方法、時期または備付個所を指定する献納品については軍部の必要によりこれか変更をなすも意義を申し出てさる如く予め諒解を求めおくものとす

4．別紙

1．国防献品飛行機の標記は陸軍軍用飛行機標識の規程によるのほか本規程によるものとす

2．国防献品飛行機には胴体尾部両側に付図により「愛国」の標識、番号および献納者の姓または地方名団体名等を記す

3．国防献品飛行機には各機種を通し番号を附するものとする

附記

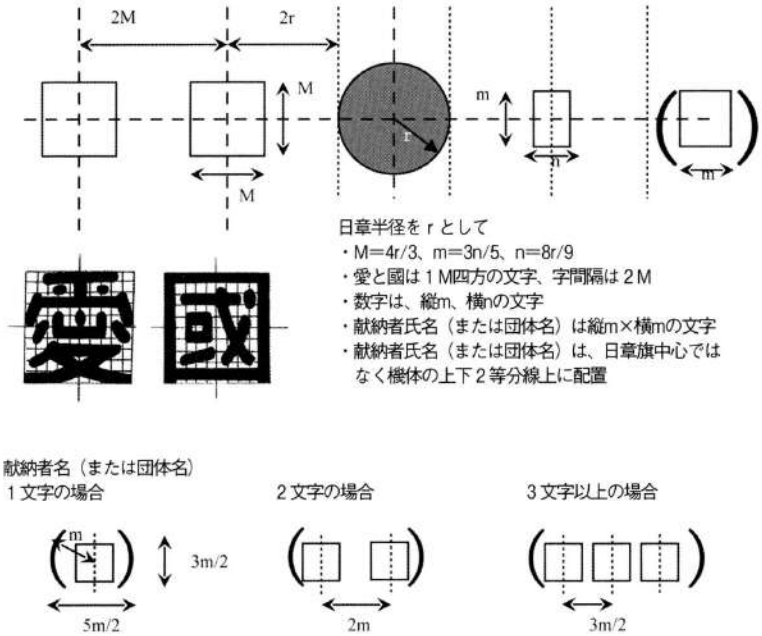
1．各規程により標記しある飛行機は本規程にもとづき伝記するものとす

2．本標記に使用する塗料は飛行機用金属塗料または「ドープ」とし色相は黒とす

3．衛生用として諸設備を施しある飛行機に対し本規程以外の標記はとくに指示なき限り施さざるものとす

九一戦の書体には写真1の2通りが知られている。1つは小さい書体のもので、昭和7年4月中にまで命名式が行なわれた愛国3「小布施」号～同18「第

図1．初期の愛国号の胴体標記



十師管山陰」号までが小さい書体である。一方、愛国24「三井鉱山」号からは大きい書体になっており、字体も異なっている。図1に示す「愛国」の標記は、後者である（写真1右）。

九一戦と並んで初期の愛国号として機数の多い八八軽爆／偵察の愛国の文字には3書体あり、製造所で異なる。石川島はごく初期とそれ以降の2つ、川崎造船が1書体である。写真2の右は川崎で製造されたもので、「愛」に特徴がある。すなわち、「愛」の下側が「夊」でなく「又」で、上の「心」が「必」となってその一画が伸びたものと組み合わさっている。川崎はこの独自の書体を多用しており、九二戦（除 愛国79「労働」、92「横浜」）や九三単軽でもこの書体が用いられている。九二戦の例を写真3に示す。

また、胴体への標記は、左右面では字の方向が異なる。

〈左面〉（機首→尾翼）

「愛国」＋日の丸＋愛国号番号＋「（献納者名）」

〈右面〉（尾翼←機首）

「（名者納献）」＋愛国号番号＋日の丸＋「国愛」

右面は当然機首から尾翼方向（右から左）への読みだが、愛国号番号だけはアラビア数字標記のため、右面でも左から右への読み（写真4）になる。これは、献納記念絵葉書でもそうで、この辺を知っていないと、「123国愛」を愛国321と誤解してしまう。

写真1．九一戦における「愛国」の書体。

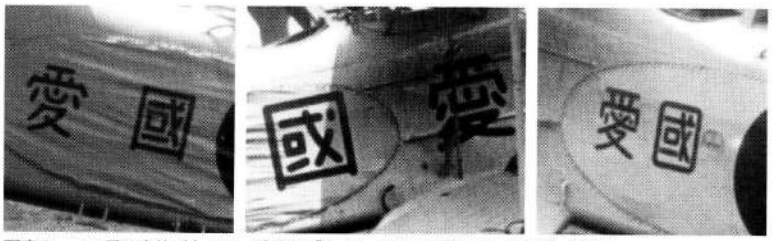


写真2．八八系の書体（左から、愛国12「立山」、愛国35「防長」、愛国36「香川」。

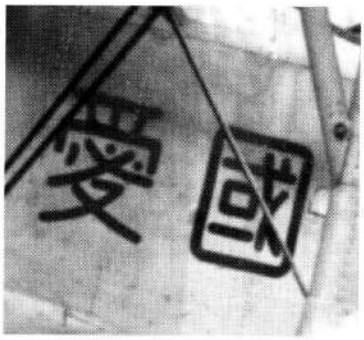


写真3．愛国45「鹿児島」号（九二戦）の「愛国」の文字。

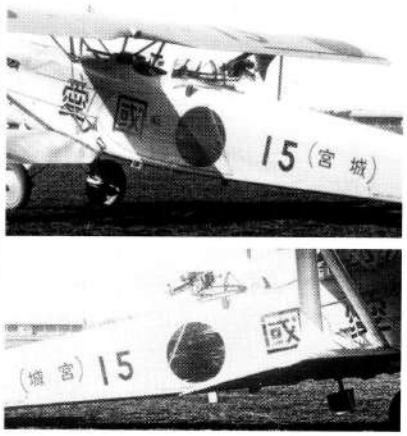


写真4．左右両側面の愛国号標記。

●「国防献品飛行機標記の存続に関する件通牒」（昭和7年12月14日付の陸普第七三四〇号）

1．国防献品飛行機を記念するためその補充に用いられたる飛行機には愛国第何号（原番と同一番号）なる標記（個人、団体または地方名の名称を除く）を継承せしむ

2．前号に依る愛国第何号なる標記の継承は該当飛行機の機種を改変せらるる時期を以って打ち切るものとす

3．国防献品飛行機の保管部隊は該飛行機廃品となりたる際これを補充すべき飛行機に前各号および国防献品飛行機の標記に関する規程により標記をなしてこれを履歴に記録するものとする

4．保管部隊前号により標記をなしたる場合は直ちに順序を経て陸軍大臣および陸軍航空本部長に報告もしくは通報をなすものとす

つまり、機種改変直前でもない限り、事故機は同機種他機へ継承されているはずとなる。そして、少数の写真例であはあるが、一項のとおり継承された機体には愛国号番号は書かれるものの、献納者（団名）名は書かれていない。後出の写真6の愛国17「岡山」号、愛国113「協同産業第二」号は、双方とも継承機であり、写真7の三井鉱山号も同様であろう。

●昭和12年4月8日付、第一八八六号

規程別紙の通り改正せられたるに付き依命通牒す。追って昭和七年十二月十四日附き陸普第七三四〇号による規程は自然廃止の儀と承知せられたし

改正理由

昭和十二年二月一日陸普四七五号による陸軍軍用機標識規程改正理由と主旨と同じく番号を大書するは防諜上不利なるを認めたるによる

愛国号標記が極端に小さくなっているのは、本通牒によるものである。図2に標記例を示す。愛国130号前後から、この規定が適用されている（写真5参照）。

また、愛国番号の標記継承も本通牒により廃止されてしまったが、次通牒・次々通牒で復活している。

●昭和14年8月17日付、陸普第五一七二号

1．昭和13年陸普第五九一八号首題規則附則に次項を追加

「三.飛行機の愛国号関しては愛国号記録附表第七その一、その二の様式を作成し履歴とともに保管す」

2．附表中別紙附表第七その一、その二に二葉を追加

理由

愛国号飛行機の履歴を明瞭にし保管せしむる必要による

附表第七その一

愛国号記録　愛国第何号(何々式何々号)	
献納者(代表者) 住所　氏名	
献納の由来	
配属部隊	
備考	

●昭和14年8月25日付、陸普第五三六四号

首題の件別紙の通り改正せられたるに付き依命通牒す

追って昭和七年十二月十四日附き陸普第七三四〇号による規程は自然廃止の儀と承知せられたし

改正理由

愛国号の名称をも併せ継承しその熱誠に報ゆとともにこの活動の概要を明らかにし適宜献納者に連絡する要あるものと認めたるによる

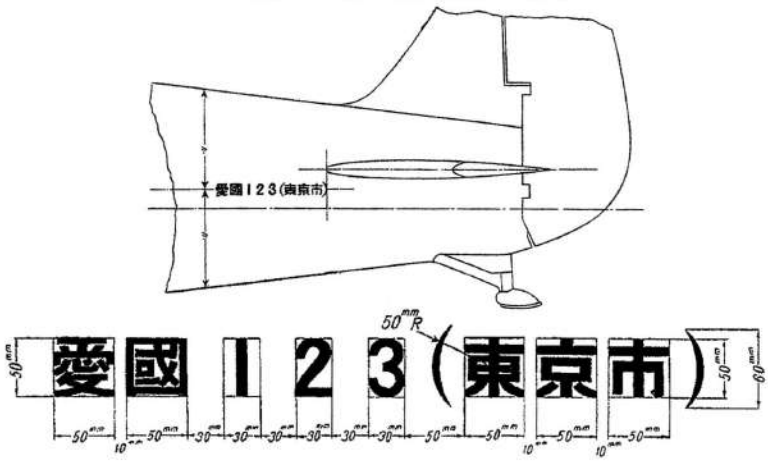
別紙

1．国防献品飛行機を記念するためその補充に用いられたる飛行機には愛国第何号(原番と同一番号)なる標記(個人、団体または地方名の名称を除く)を継承せしむ

2．前号に依る愛国第何号なる標記の継承は該当飛行機の機種を改変せらるる時期を以って打ち切るものとす

3．国防献品飛行機の保管部隊は該飛行機廃品となりたる際これを補充すべき飛行機に前各号および国防献品飛行機の標記に関する規程により標記をなしてこれを履歴に記録するものとする

図2．愛国号の胴体標記（小文字化後）



4．保管部隊前号により標記をなしたる場合は直ちに順序を経て陸軍大臣および陸軍航空本部長に報告もしくは通報をなすものとす

5．昭和12年4月8日陸普一八八六号により愛国番号および名称の標記をなしたる該飛行機の保管部隊は毎年概ね九月一日調にて愛国号飛行機の主なる功績および履歴を航空本部長宛て報告もしくは通牒するものとす

●その他

ノモンハン事変期に献納された愛国号は、新聞紙面で活躍が盛んに報道されている。

これらを受けてだろう。昭和15年5月には損傷した愛国号を記念すべく正式に「第二献納機の補充を認め、継承機として台帳に記載」(東京朝日新聞、昭和15年5月10日付)という記事が掲載された。前述のようにすでに制度化されているのだが、改めて周知することで注目を引くということだろう。

台帳の初筆は、愛国307「北日本汽船号」と、新聞記事は伝えている(写真5参照)。

愛国号の消息

愛国号のみでなく、軍用機の消息は掴めないのが主であるが、稀にその後の消息が判明したものがある。いくつか、挙げてみる。

・愛国3「小布施」号(九一戦)

昭和13年4月6日、関東軍第12野戦航空廠において関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取の上、売却と決定。

・愛国5「小布施」号(八八偵察)

昭和7年3月30日、石谷清輔航空中尉と清田　泉航空少尉によりハルピンを離陸した愛国5号「小布施」号(八八式一型偵察機)は、満洲国吉林省依蘭店付近の敵情捜索からの帰還途中に

写真5．昭和12年4月以降の標記例(愛国126「高倉」号(上)と愛国307「北日本汽船」号)。

敵弾を受けて、通河東方約10kmの松花江付近で行方不明となり、4月8日、機体が地上で焼却されていることが判明。

なお、清田泉少尉(殉職により進級)の故郷である熊本県玉名郡玉東町には、中尉の立派な碑が残っているとのこと(情報提供：熊本県 姫野照正氏)。

・愛国7「群馬」号（九一戦）

昭和7年4月10日、上海の公大飛行場にて独飛第三中隊への授受式。航空ページェントが併催され、重光公使、白川大将らが臨席した。

同13年9月1日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、愛国77「三越」号(九一戦)とともに、再用部品採取のうえ、金属は鋳物材料としては売却と決定。

・愛国8「川喜多」号（九一戦）

飛行11連隊所属機。昭和11年1月13日、哈市飛行場に着陸の際左車輪を折損。左脚に装着の3号機上電機器具(発電機）の廃兵器検定書はあるが、機体に関しては見当たらないため、機体は廃兵器には至っていない模様。

・愛国11「長岡」号（八八軽爆）

昭和9年5月、所沢で行なわれた愛国号命名式に参加し各務ヶ原へ帰還途中、静岡市西方約8kmの中藁科上空で猛烈な下降気流に遭遇し、機関係の植松俊雄雇員が機外に放り出され殉職。

・愛国14「若越」(九一戦)

昭和12年9月4日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国16「宮城」号（八八軽爆）

八日市の第三連隊所属。昭和9年9月7日、浜松での演習に参加し、その帰還途中（木村伍長操縦、小川少尉同乗)、四日市市郊外に不時着、脚部を大破。

・愛国17「岡山」号（九一戦）

（初代：製造番号128号）

昭和10年10月、廃兵器検定。

（2代？：製造番号261号）

11年5月、飛行第11連隊において261号を充当し継承。その261号「岡山」号も、愛国113号とともに12年1月に廃兵器検定された。その原因となった事故と推察される写真が残されている(写真6参照)。

・愛国21「朝鮮」号（八八軽爆）

間島臨時派遣飛行隊に派遣されていたが、昭和8年4年、「使用時間300時間に達したため後送修理につき、交換願う」の書類がある。

写真6．愛国17号と愛国113号の継承機同士の事故（写真提供：出射利明氏)。

写真7．愛国24「三井鉱山」号。

・愛国22「帝生」号（八八軽爆）

飛行第12大隊に所属。昭和10年10月29日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国23「台湾」号（八八軽爆、製造番号806号）

昭和11年3月29日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国24「三井鉱山」号（九一戦）

昭和10年4月、廃兵器検定。残されている本号の写真（写真7）には、献納者団体名が記入されていないため、継承機の可能性がある。

昭和10年4月1日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、教育用として軍において使用と決定。

・愛国26「台湾」号（八八偵）

命名式前の昭和7年7月8日、台湾の屏東飛行場における試験飛行時に故障、不時着。

・愛国27「千葉」号（九一戦）

（初代：製造番号133号）

昭和7年10月24日、ハルビン上空で訓練中に僚機と衝突し、墜落。操縦者の東久保伊一郎中尉は、パラシュートで降下して無事。

（世代不明？：製造番号169）

昭和11年12月26日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定。

・愛国28「徳島」号（八八軽爆）

昭和13年9月3日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国29「北海道」号（九一戦）

昭和8年1月9日、関東軍飛行第11大隊の沓掛節雄少尉操縦により満州巴彦周辺の匪賊威嚇のため出動し、その帰還中に天候険悪・視度不良により僚機（古寺 巽軍曹操縦の愛国63「満洲」号）と衝突し、両名殉職。

・愛国30「女学生」号（八八軽爆）

飛行第十大隊機として、満洲事変に参戦。

「女学生」という名称からか独身パイロットに人気があったとのこと。航研機で有名な藤田雄蔵大尉乗機ともなり、偵察機でありながら地上攻撃にも戦果を上げて、武勲機として靖国神社の国防館に展示された。

雑誌『空』(昭和17年10月号）の読者投稿欄に国防館広間での見学記が載っており、愛国1号とともにこの時期までは展示されていた（写真8)。

写真8．国防館に展示中の愛国30「女学生」号。

・愛国34「浜田」号（九一戦）

昭和8年11月8日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、地上教育用として充当と決定。

・愛国35「防長」号（八八軽爆）

（初代）

昭和8年11月8日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取の上、軍にて処分と決定。

（2代？：製造番号807）

昭和11年5月12日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国36「香川」号（八八軽爆）

飛行第12大隊に所属。

・愛国38「京都」号（九一戦）

昭和10年7月29日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国39「信濃」号（九一戦）

昭和9年5月28日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国41「愛媛」号（九一戦）

飛行第11連隊所属機。昭和10年11月19日、哈市飛行場東北約8㎞の上空において射撃訓練中に発動機が停止、不時着時に転覆。

昭和11年1月29日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国43「朝鮮」号（九二戦）

昭和10年7月6日、初代（製造番号8号）が関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。7月29日、関東軍野戦航空廠長名で、製造番号43号に継承と報告。

・愛国45「鹿児島」号（九二戦）

昭和10年12月3日、飛行第六連隊の道見多作曹長が操縦中、空中発火し墜落。曹長は殉職。

・愛国46「福島」号（八八軽爆）

飛行第12大隊に所属。昭和10年12月23日、飛行第16連隊の第三中隊中期検閲の仮設敵機として奥田曹長が操縦し、午後1時過ぎ、濱江省牡丹江市西方1㎞の畑地に不時着。

・愛国48「佐賀」号（九一戦）

昭和9年9月17日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、地上教育用に充当と決定。

・愛国51「新潟」号（九一戦）

新潟市営飛行場での命名式（昭和7年9月11日）挙行後に横山中尉（新潟県小須戸町出身）により県内披露飛行を行なった際に不具合を生じて修理。その試験飛行に今川一策大尉（新潟市出身）の操縦で飛行したが、その着陸時に砂中に車輪を突っ込み逆立ち、プロペラ、方向蛇を大破、大尉は軽症を負う。機体は所沢での修理のため、分解・陸送。

地元新聞では「新潟縣の3文字の胴体書きが」とあるが、残っている写真では「新潟」号になっていることから、修理後に「新潟」に書き換えられた、または別機になった可能性がある。（事故の約40日後の別な命名式に「新潟」号として参加しており、別機になった可能性が高いと考えている）

・愛国52「新潟縣」号（九一戦）

昭和12年9月4日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国54「岐阜」号（九一戦）

昭和11年4月7日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国55「秋田」号（九一戦）

昭和10年4月1日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国58「小倉」号（九一戦）

（2代：製造番号153号）

昭和8年11月8日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国59「土佐」号（八八軽爆）

昭和9年3月24日、栃木県大田原の金丸原飛行場に向かう途中、福島県西大河郡に不時着、大破。

・愛国61「和歌山」号（九一戦）

（初代：製造番号170号）

飛行第11連隊所属機。昭和10年11月5日、満洲里において騎兵集団連合演習中、友軍斥候と連絡のため着陸しようとして、転覆・大破。

昭和11年1月29日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

（2代：製造番号601号）

昭和11年5月、飛行第11連隊において、九一式戦601号機を充当して継承、と報告あり。

・愛国63「満洲」号（九一戦）

昭和8年1月9日、飛行第11大隊の古寺 巽軍曹操縦により、満州巴彦周辺の匪賊威嚇からの帰還中、天候険悪・視度不良により僚機（沓掛節雄少尉操縦の愛国29「北海道」号）と衝突。両名殉職。

・愛国64「満洲」号（プスモス）

昭和13年6月、関東軍第12野戦航空廠において廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国65「満洲」号（プスモス）

昭和8年5月22日、熱河特務機関長松室騎兵大佐を運ぶため、満洲承徳飛行場を出発。郭家付近にて匪賊からの射撃を受け不時着。銃撃戦となり、操縦の白川兵曹は殉職。

・愛国67「満洲」号（プスモス）

昭和9年1月13日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国69「富国」号（九一戦）

昭和9年5月28日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国70「栃木」号（八八軽爆）

昭和10年6月8日、在満飛行隊の長谷川孝軍曹操縦（三原伊東喜伍長搭乗）により、満洲浜江省鏡泊湖内無名島にて匪賊を発見し、急降下爆撃中に地上よりの銃撃を受け墜落。両名は殉職。

・愛国71「埼玉」号（八八軽爆、製造番号830号）

飛行第16連隊機。昭和12年6月17日に廃兵器検定され、再用部品採取の上売却と決定。

・愛国73「東京瓦斯」号（九一戦）

命名式から３ヵ月も経たない昭和８年６月８日、奉天野戦航空廠における試験飛行中に発動機が脱落、墜落大破。（操縦者は無事）

・愛国77「三越」号（九一戦）

昭和13年９月１日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、愛国７「群馬」号（九一戦）とともに、再用部品採取のうえ、金属は鋳物材料とし他は売却と決定。

・愛国78「日清紡」号（九一戦）

昭和12年９月４日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取の上、売却と決定。

・愛国81号（ケレットK3、写真９）

昭和８年11月９日付で、陸軍航空本部立川支部に保管されている回転翼飛行機機体（×１）、発動機（×３）、プロペラ（×１）、下志津陸軍飛行学校へ特別支給。

昭和９年６月８日付で、下志津飛行学校へ特別支給されていた同機を、所沢飛行学校へ支給換。

・愛国82号（ケレットK3）

昭和８年６月28日、事故。

同年９月４日付で、陸軍航空本部に保管してあった廃兵器（残骸）をカ号研究用として技術部に交付。（回転翼飛行機機体、プロペラ各×１）

・愛国86「産業協同第一」号（九一戦）（世代不明？）

飛行第11連隊所属機。昭和11年２月15日、新京飛行場への帰還途中、燃料タンクの空気抜孔の凍結閉塞により発動機停止。不時着し、プロペラを大破。（世代不明？）

昭和12年９月４日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

写真９．愛国81（手前）と愛国82。

・愛国87「佛立」（九一戦）（初代？）

飛行第11連隊、臨時派遣飛行隊所属機。昭和11年４月13日、海拉爾飛行場において空中射撃標的機として吹流しを引いて離陸するも、高度150m付近にて発動機が停止。飛行場に不時着するも、その際に強い横風を受けて転覆し、プロペラを破損。

（２代？：製造番号517号）

昭和12年10月１日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国88「通運」号（九一戦）

昭和10年４月１日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国90「第二千葉」号（九一戦）（初代：製造番号565号）

昭和10年５月27日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

（２代：製造番号330号）

昭和11年１月29日、耐寒訓練からの帰還中に発動機停止し、不時着、転覆。

昭和11年４月24日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国95「大阪薬種製薬」号（フォックスモス患者輸送機）

昭和12年11月20日、関東軍航空兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国96「大阪薬種製薬」号（スーパーユニバーサル改造患者輸送機）

昭和11年11月25日、関東軍野戦航空廠長名で廃兵器検定され、再用部品採取の上売却と決定。

・愛国97「大阪薬種同業組合」号（写真10）（石川島小型患者輸送機）

『日本航空輸送史・輸送機篇（I）』の河野正美氏の回想中に、愛国97「大阪製薬同業組合」号が昭和16年４月末時点でも可動中の記載がある。同号は昭和９年４月に大阪で命名式が挙行された機体であり、実動７年というのは長すぎるため、継承機の可能性が高い。

・愛国100「三重」号（九三単軽）

写真10．愛国97「大阪薬種製薬」号。

昭和12年４月26日、関東軍野戦航空廠長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、同型機（製造番号85,527,537）とともに売却と決定。

・愛国105「台湾製糖」号（九三双軽）

昭和12年３月26日付にて、飛行第８連隊の同機を特業教育用に定数外として支給。飛行時間324時間と48分。

・愛国106「陸軍軍医団」号（フォックスモス患者輸送機）

昭和９年８月17日、同賓―哈爾賓間での患者輸送の際に、事故。

・愛国109「日特」号（九三単軽）

昭和９年６月26日、関東軍飛行第○大隊付の糸田貞吉中尉操縦・西村中尉同乗により、爆撃演習のため離陸。演習終了にともない着陸するもその際、右翼に懸吊された25kg爆弾が落下・爆発し、同乗者とともに両者殉職。

・愛国111「大学高専」号（九一戦）

飛行第11連隊機。昭和11年３月31日、海拉爾飛行場を離陸後の約40分後、滑油温度上昇により近くの甘珠見飛行場に不時着を決意。進入時、滑走路上に人を認め復航を図るも、発動機回転数を上げられず積雪地帯に着地、転覆してプロペラを破損。

・愛国112「不動貯金」号（九三双軽、製造番号31号）

昭和11年４月24日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、軍にて処分と決定。

・愛国113「産業協同第二」号（九一戦：製造番号597号）（世代不明）

昭和12年１月10日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、愛国17号とともに地上教育用として使用と決定。

・愛国114「蜂須賀」号（プスモス）

昭和10年度に、所沢飛行学校で32.48時間の飛行時間（延べ飛行人員172名）

写真11. 羽田飛行場の命名式における愛国268号。

・愛国115「遍照」号（九三単軽：製造番号50号）

昭和12年11月20日、関東軍航空兵器部長名で廃兵器検定され、再用部品採取のうえ、売却と決定。

・愛国117「新潟」号（九三双軽）

命名式から3日後の昭和9年7月15日、新潟県下の防空演習に参加し、帰還途中に不時着、大破。

・愛国121「東京」号（九四偵）

昭和12年11月12日、本機（乙型、728号）は、着陸訓練中に僚機と衝突し大破。同型機（868号）に継承され、12月4日付で飛行第7連隊長名にて陸軍大臣に報告。

なお、初代は単排気管・短胴の甲型のため、2代目でもなく、3代目までが判明している貴重な例かもしれない。

・愛国127「カトリック」号（石川島小型患者輸送機）

昭和12年5月の命名式後、関東軍飛行隊用として交付、と決定。

・愛国128、129「満俵」号（ユンカースJu160）

昭和12年4月1日、関東軍飛行隊用として関東軍航空本廠へ、ともに立川から空輸。愛国129号は、昭和13年9月3日、関東軍第1野戦航空廠長名で廃兵器検定され、再用部品採取の上売却と決定。

・愛国170「全日本号」（九七司偵）

昭和13年12月、大室大尉の乗機として重慶飛行場偵察に殊勲をあげ、翌年1月に部隊感状が、5月には大室大尉に個人感状が与えられている。これを報道した朝日新聞（昭和14年5月9日付）に、大尉の次のインタビュー記事がある。

「私一人が感状を受けるより部隊全体にほしい気持ちでいっぱいです。全日本号と私は実に深い関係があり、全日本号の第一号機である愛国第十七号（原文ママ）を操縦したのが私です。それ以来、私はずっと全日本号の乗り切りです。皆様のお陰で事故もなくやっているのであります」。

文中の十七号というのは愛国17（「岡山」号）のことではなく、170号の誤記（または誤植）であろう。

・愛国215「松坂屋」号（九七戦）

昭和13年7月14日、関東軍兵器部長名で廃兵器検定され、部品採取のうえに焼却、残りは売却と決定。

なお、本機の献納記念絵葉書は九五戦になっており、前稿で記した献納記念絵葉書の機種間違いは、九七戦から一式戦への改変期だけではないことが分かる。

・愛国223「日本醫師會第一」号（石川島小型患者輸送機）

昭和14年7月、愛国147「吉原」号（患者輸送機）とともに、北支那派遣軍に交付。昭和16年8月6日、中華航空による運航中、天津飛行場にて事故。継承機がなかったのか、原因が中華航空にあるとされたためか、同社の小型患者輸送機（登録記号C-9006）が代替機に充てられた。

・愛国268、269「日本看護婦」号（フォッカースーパーユニバーサル改造患者輸送機）

昭和13年に全日本看護婦団から献納された2機は、1機が5月30日に羽田飛行場で愛国268「日本看護婦第一」（写真11）に、もう1機が4月11日に大阪の大阪盾津飛行場で愛国269「日本看護婦第二」と、それぞれ命名された。

両機は大陸へ送られて患者輸送や要員輸送に使用され、能都一男氏の『元中華航空機関士の記録 北京の鳩』に、昭和13年12月7日、両機が北京に配備されたとの記載がある。「油汚れひとつない真新しいものだった」とあり、中華航空に運航依託され、社員が軍属として運航していたことが窺える。

・愛国325「東京鋳物」号（九七戦）

『陸海軍戦闘機献納報告書（東京鋳物業組合、昭和14年）』に、東京鋳物号（昭和14年6月命名式）のその後が掲載されている。それによれば、同機は、飛行第11連隊第1中隊に配属され、長谷川智在少尉（ノモンハン事変にて、伝撃墜数19機）の上記となった。少尉ともに写る白い稲妻マークの同機の写真が、報告書には掲載されている。

まとめと調査協力のお願い

2011年7月末時点において、判明しているもっとも大きい愛国号番号は7169号であり、大きな欠番なく、実数として7,000機を超過する献納が行なわれたと考えられる。

この驚くべき数値には、無論、当時の体制面が濃厚に作用しているであろうが、もっとも大きい理由には、国民体質があるだろう。現代でも言われるような、「熱しやすい」「（流行に）流されやすい」体質であり、これが「国民総献納状態、7,000機超」という状況を生み出した下地だろうと考えている。

7,000機強のうち判明した愛国号は1,800機弱（Web未発表機を含む）で、まだ25%程度しか掴めていない（番号不明機を含めても、2,200機強、30%強）。今回の報告で、その一部にせよ実態を明らかにできた部分があるかと自負するが、今後も継続していきたい。残った愛国号を発掘していくことによって、航空史の空白を埋めるとともに、ひとつの戦前史が明確になっていくものと思われる。

そのためにもこの報告をきっかけにして、「自分の地元は、どんな軍用機を献納したか」に興味を抱いていただければ幸甚である。各位のご協力を得て、7,000ピース超の巨大なジグソーパズルを完成させることが筆者の願いである。その日が遠くないことを願いながら、この報告を終わりたい。

最後に、30年以上におよぶ調査過程において、個人・企業など非常に多くの方々にご協力をいただいた。ここでお名前をあげることは適わないが、この場を借りて御礼を申し上げる。

2011年7月、横川裕一

●ご連絡は下記URLにお願いしたい。
陸軍愛国号献納機調査報告
http://www.ne.jp/asahi/aikokuki/aikokuki-top/Aikokuki_Top.html

次号では補足・番外編として愛国号フォトアルバムを掲載します（編集部）。